



教員の指導力・授業力を高める仕組みを整えるための 教頭の関わり

—国際バカロレア教育認定校を目指した取組を通して—

高知県香美市教頭会 香美市立大宮小学校 中島佳史

1 主題設定の理由

香美市教頭会では、香美市が進める小中一貫教育の実現に向けてどう取り組んでいくかを話し合い、小中一貫教育を令和2年度の研究の柱にした。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大により各中学校校区の実践が十分にできないまま2学期を迎えることとなったため、小中一貫教育についての研究は続けつつも、香美市教頭会の研究としてではなく、本校大宮小学校の取組を本研究会への提言とした。

香美市では、保幼から大学のある「まち」として、学びの連続性を大切にしながら、「まちづくりは人づくり」という考えのもと、教育を中心に据えた「まちづくり」を目指している。香美市教育振興基本計画（後期）では、*香美市よってたかって教育～郷土を愛し、未来を拓く人づくり～を基本理念とし、互いに持てる力を合わせ、創意工夫しながら新しい時代を拓いていく人づくりを目指している。市内には、8校の小中学校があり、それぞれの中学校校区内で連携を取りながら、探究的な学びを大切にされた教育が進められている。

本校では、探究型学習を中心に据えた国際バカロレア教育（以下IB教育という）の認定校を目指して取組を進めてきた。令和2年10月には認定訪問を受け、現在はIB認定PYP校としてスタートしている。また、令和4年度には全国小学校英語教育実践研究大会の発表会場校として決定しており、毎年、公開授業を行うなど、外国語に関する研究も進んでいる。さらに、外国語教育以外でも、これまでに算数科を中心としたユニバーサルデザインによる教育や食育に関しても長らく推進してきた。

昨年度から、これまで本校が取組んできた研究を基にしつつ、IB教育の理念を中心にカリキュラム・マネジメントを行い、効果的で効率の良い教育活動、教職員の組織づくりを目指し

て取組を進めてきた。

本提言では、教職員の集団づくりと共に、教員の指導力・授業力を効果的に高める仕組みを整えていくことが、教職員の学校運営参画と人材育成につながると考え、本主題を設定した。

*香美市よってたかって教育：香美市の「めざす人の姿」に向けて、香美市民が"よってたかって"みんなに関わり合い、みんなで高め合いながら、香美市を元気にする教育活動のこと。

2 研究のねらい

高知県では、近年、小中学校教員の若返りが急速に進んでいる。ベテラン教員の大量退職などに伴い、10年前の2010年度時点で3%だった20代の割合は、2020年度は16%に増えてきている。本校でも、本年度は全教員の38%が20代の教員であり、人材育成が大きな課題となっている。国際バカロレア教育認定校を目指すに当たり、次の2つの取組を通し、若年教員だけでなく全教職員が支え合い、指導力・授業力を高め合う集団を目指した。

- (1) 変化に強く小回りの利く教職員集団を作っていくために、教職員間の連絡と調整をこまめにとり、進捗状況の把握や各主任担当の自覚を促していく。
- (2) 効果的に教員の指導力・授業力を高めるために、研修と実践のサイクルを整える。

3 研究の経過

平成30年度

- ・国際バカロレアPYP候補校となる。

令和元年度

- ・国際バカロレアPYP認定校に向け、大幅なカリキュラムの編成に取り組む。（探究プログラム見直し、探究ユニット作成）
- ・言語ポリシー、評価ポリシーの素案作成。



- ・IBミーティング（週1回の学級担任とIBコーディネーターとの打合せ）の実施。
- ・校内研修体制強化のための週時程見直しおよび見直しに合わせた研修計画作成。

令和2年度

- ・探究プログラムの本格実施および探究ユニットの編成。
- ・新週時程の実施と週3回の研修実施。
- ・各学期末に成績処理期間を設け、放課後に会議や研修を入れないようにする。
- ・学期ごと児童一人一人に探究学習のフィードバックを作成。
- ・国際バカロレア教育機構のオンライン認定訪問を受け、PYP認定校となる。

4 研究の概要

(1) 研究体制と教職員集団づくり

PYP校認定に向けた取り組みのリストアップを行ったうえで、以下のように、PYP校としての校内研修や探究プログラム、探究ユニットおよびプランナーの作成時間の確保や成績処理期間の設定をした。

- ・毎週水曜日以外の日に研修日を設定
火曜日（15：55～16：45）
金曜日（15：55～16：45）
- ・IBミーティング（6校時までに週1コマ）
- ・成績処理期間の設定（毎学期、児童一人一人にA4用紙1枚の探究学習のフィードバックをするため、フィードバック作成の期間を2週間程度取る）
また、連絡と調整を確実にしていくために、以下のようなコンパクトな打合せをこまめにとった。
- ・教頭とIB担当、教頭と教務、教頭と研究主任、教頭と外国語担当→短時間の研究推進会や英語関係者会（両者を合わせて月4回程度）

(2) 教員の指導力・授業力を高めていく仕組みづくり

週3日の研修計画を立て、研修→実践→共有→実践→研修→実践…のサイクルをつくった。

研修は、IBの基本理念から実践に即つながらるものまでであるが、思考ツール等を取入れ、

話し合いや学び合いを大切にするなど、できるだけ講義形式にならないような工夫をした。また、共有では各学級の掲示物や成果物を全員で教室を回りながら実践の報告をし合い、事後にすぐ実践に取り入れる体制づくりを目指した。

IBミーティングでは、探究の授業をIBコーディネーターと振り返りながら、ユニットのゴールや展開、発問や指示等について打合せを行った。

5 研究の成果と今後の課題

IB教育認定校に向けた取組についてしなければならぬことを挙げてみると相当数に上る。担任や担当の業務をしながら新しい取組を始めることは、教職員にとって大きな負担感を生むことが多々ある。しかし、週時程を見直し、研修時間を確保したり打合せの時間を校時表に明記することにより、学期末の反省でも負担感が減ったという意見が多数見られた。また、コンパクトな打合せを小まめにとることで、定例の研究推進会や英語関係者会、各部会など短時間で終えたり、進捗状況の共有が素早くできる等の利点もあった。

週3日の研修では、理論的なことだけでなく、授業ですぐに活用できるものや各教室巡りをしながら各担任の実践を紹介し合う内容等もできるだけたくさん取り入れるように計画した。回を重ねるごとに、研修→実践→共有→実践→研修…のサイクルが少しずつ形になりつつあり、研修後にすぐに学んだことを取入れる雰囲気もできてきた。また、週1コマ（45分間）のIBミーティングを6校時内に設定することにより、学級担任は、探究の授業のことだけでなく、学級経営のことや授業の進め方等のアドバイスを受けることも可能となり担任にとっては貴重な時間となっている。

一方で、研修時間確保を優先するため、曜日によっては時間的に厳しい日程になったり、一部の担当の負担が大きくなったりしたことも否めない。教頭として、目的や方向性を明確にし、変化に強く小回りの利く教職員集団をつくるとともに、研修と実践のサイクルを整えていくことを大切にしていきたい。

第1A

第1B

第2

第3

第4

第5A

第5B

第6

特I

特II